朝鮮民俗学会の成立とその活動

The Formation and Activity of Korean Folklore Society

金 広植

KIM Kwang-sik

要　　旨

本稿は朝鮮民俗学会の成り立ちとその活動を実証的に考察したものである。1932 年 4 月に朝鮮民俗学会が成立してから 80 年が過ぎた。1990 年代半ばまでの先行研究は、秋葉隆・今村鞆などの日本人民俗学者と孫晋泰（1900 ～ 1960 年代中半）・宋錫夏（1904 ～ 1948）などの朝鮮人民俗学者の差異点だけを強調してきた側面が根強い。近年、全京秀・南根祐などの実証的な研究によって、図式的な二分法を乗り越え、朝鮮民俗学会の実体を解明しようとする作業が進められている。本稿はまず、これまでの先行研究を検討して、近年の成果に学び、これまでは検討されなかった 1930 年以降の新聞・雑誌記事を具体的に分析した。その作業を通して「宋錫夏著作目録」を作成し、それに基づいて宋錫夏の業績と学会活動を考察した。

朝鮮民俗学会は機関誌『朝鮮民俗』一号を 1933 年に、二号を 1934 年に刊行してから、1940 年に宋に代わり、秋葉隆の編輯による「今村鞆古稀記念」三号を出すのみで、1945 年の解放まで全ての活動が中断されたという言説が主流となっている。それに対して本稿では、出来る限り朝鮮民俗学会および会員の活動を取り上げた。1930 年代の新聞と雑誌記事を比較分析して、発起人、学会会員および学会活動を浮き彫りにした。特に、1939 年を中心に朝鮮民俗学会員が『観光朝鮮』に民俗学関連論考を掲載したことを明らかにした。1937 年 5 月、朝鮮民俗学会主催の「第 1 回朝鮮郷土舞踊民謡大会」などの宋の実践を考慮しても、先行研究の 1930 年代半ば以降の中断説は、見直さなければならない。

先行研究では、宋と孫の実践を民族主義的な立場から高く評価するのが主流になっているが、近年それに関する政治的なコンテキストに対する批判がなされた。今後は、宋と孫の肯定・批判を乗り越えて、彼らが目指した朝鮮民俗振興論と、他の朝鮮人および村山智順などの日本人学者が目指した言説の共通点と差異点に関する具体的な検討が求められる。

【キーワード】　朝鮮民俗学会、宋錫夏、孫晋泰、『観光朝鮮』（『文化朝鮮』）、植民地期朝鮮

目　次

Ⅰ　はじめに
Ⅱ　先行研究の検討
　1　宋錫夏、孫晋泰の評価をめぐって
　2　朝鮮民俗学会の成立について
Ⅲ　朝鮮民俗学会の成立、会員とその活動
　1　朝鮮民俗学会の創立と会員
　2　朝鮮民俗学会（会員）の活動
Ⅳ　おわりに
附録　「宋錫夏著作目録」

Ⅰ　はじめに

近年、日本民俗学・民族学に関する学史を検討する共同研究の成果が公刊され、帝国日本の中で展開された民俗学の成立とその学知が整理されている。戦前の帝国日本は植民地支配を拡大していっただけに、民俗学史における植民地の問題は避けて通れない課題となっている。実際に山路勝彦編『日本の人類学―植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史―』の「第一部　植民地における人類学」では「第三章　植民地期朝鮮の日本人研究者の評価（今村鞆・赤松智城・秋葉隆・村山智順・善生永助）」（朝倉敏夫）と「第四章　朝鮮総督府調査資料と民族学―村山智順と秋葉隆を中心に―」（崔吉城）が朝鮮民俗学に関するテーマとなっている。また、ヨーゼフ・クライナー編『近代〈日本意識〉の成立―民俗学・民族学の貢献―』の「第二部　植民地の多民族国家の民族学と民俗学」でも「朝鮮文人社会の知的伝統と民俗学」（伊藤亜人）と「日本民族学者の植民地朝鮮認識」（崔吉城）が朝鮮民俗学を取り扱っている。これらの共同研究成果は、学界の最新動向までを含めた議論となっており貴重であるが、日本民俗学史としてのアプローチとなっており、朝鮮人民俗学者の動向については具体的に言及されていない。そこで本稿では、帝国日本の植民地支配下で展開された朝鮮民俗学会の成立とその活動を具体的に考察したい。また近年の成果を踏まえ、朝鮮人および日本人民俗学者の関わりについても注目したい。

朝鮮民俗学会が 1932 年 4 月に発会してから 2012 年で 80 周年を迎えた。朝鮮民俗学会創立 80 周年を記念し、韓国国立民俗博物館と韓国民俗学会が「民俗学 80 周年を論ずる」という主題のもとに 2012 年春季フォーラム（2012 年 4 月 20 日、韓国国立民俗博物館）を開くなど、話題となっている。一方、管見の限り、朝鮮民俗学会について検討した日本語文献は、後述する南根祐、梁永厚（ヤンヨンフ）、川村湊の論考を除いては見当たらない。

泉靖一・村武精一は『日本民族学の回顧と展望』における朝鮮部分を担当して、「1933（ママ）年に孫晋泰・宋錫夏を中心に、「朝鮮民俗学会」が組織され、研究活動を開始した」［泉靖一・村武精一 1966：259］と述べるに留まった。直江広治は、朝鮮人民俗学者李能和（イヌンホァ）（1869～1943）・崔南善（チェナムソン）（1890～1957）・孫晋泰・宋錫夏の業績を簡単に紹介した上で、「このような動きの中から、孫晋泰・宋錫夏らが中心に一九三二年「朝鮮民俗学会」を創設、翌年学会誌『朝鮮民俗』を創刊したが、惜しいことに一九三四（ママ）年第三号を出したところで廃刊となった」［直江広治 1987：336］と述べているが、第三号は宋錫夏に代わって秋葉隆（1888 ～ 1954）の編輯により「今村鞆古稀記念号」として 1940 年に出された。

ベストセラー『温突夜話』[1)]（日本書院、1927年）の著者として知られている英文学者鄭寅燮（チョンインソプ）（1905～1983）は、1966年に次のように回想している。

> 外国の手法だけの真似では韓国の独自性を探しにくく、韓国の伝統を再吟味する民俗への愛着を訴えざるを得なかった。それが即ち朝鮮民俗学会を創った理由である。
>
> 暫く消息が途絶えていた宋錫夏氏はその間、時々発表した仮面劇に関する論文が注目を引いていたが、彼が各地をまわりながら民俗に関する多くの材料を探したという風聞が絶えなかった。また孫晋泰氏は普成専門学校に在職[2)]しながら彼の民俗研究を深めていた。ある日、宋錫夏氏が私の在職していた延禧専門学校を訪ねてきて民俗学会を発起しようと提案し、孫晋泰氏と三者が合席することになり、今は覚えていないが、ある食堂で我々三人が集まって大略の発起会をつくった。それから日本人としては当時京城帝大（今のソウル大学の前身）の秋葉隆教授と、一時期京畿道警察部長を務めた今村鞆氏を加入させることに決めた。その理由は、前者の秋葉隆氏は我々の巫堂研究に特に趣味を持ち、相当な研究を重ねており、学者としては彼が我々の民俗研究の第一人者だといえたし、後者の今村鞆は、我々の瓢・扇等その他の民俗に関する研究が相当あった。それで「朝鮮民俗」という雑誌を三号まで出した。だから初めに朝鮮民俗学会の発起は宋錫夏、孫晋泰、私を含め三人で始まり、ここに秋葉隆、今村鞆を合わせた五人がその核心であった。そうして五人はたまに会って夕食を一緒にしながら、我々の民俗研究に関する閑談や意見交換も行った。（中略）（今村は）警察官を歴任したとはいえ、性格は誠に闊達で好人物であった。秋葉教授も特別研究費を受けて巫俗研究を重ねていたが、宋錫夏や孫晋泰や私は彼らのように官庁から一銭も補助を受けることなく、ひたすら自分たちの厳しい生計のために頑張っていた。その中でもこの二人の日本学者と頻繁に会ったのは宋錫夏氏であり、この二人を利用して自分の旅行や資料見学に便誼を図ったことだけは事実である［鄭寅燮 1966：190-191、以下、和訳は筆者による］。

上記の鄭寅燮の証言によると、5人の間にはこれといった葛藤や拮抗は見られない。むしろ朝鮮民俗学の権威である秋葉と今村を利用し、朝鮮人民俗学者は「旅行や資料見学に便誼を図った」こともある。少なくとも朝鮮人民俗学者3人にとって、秋葉と今村の存在はその権威を利用する対象であって、敵意の対象ではなかったことは確かである。南根祐が指摘する通り、従来の学史研究において一般化されている二項対立的図式とは相当な距離がある。すなわち植民地主義に奉仕した日本人の朝鮮民俗学に対して、文化民族主義に基づいた朝鮮人の朝鮮民俗学のような二分法では捉え難い「親密な」位階構図が見られる［南根祐 2008：6-7］。

趙ジョンウが指摘する通り、朝鮮民俗学の歴史的意義を十分に理解するためには、日本帝国の民俗学・人類学・民族学の展開過程の中で朝鮮民俗学を位置づける作業が求められる。朝鮮民俗学は植民地朝鮮で独立的・自生的に発生したものではなく、日本学術研究の流れの中で生まれたからである［趙ジョンウ、2008：344-345］。従来のような二項対立を強調するのではなく、両者の相互関連性および学知の共通点と差異点（普遍性と特殊性）を総合的に分析する作業が求められる。

鄭寅燮は正確な時期は明記していないものの、朝鮮民俗学会の発起は宋錫夏、孫晋泰、鄭寅燮を含め3人で始まり、ここに秋葉隆、今村鞆（1870～1943）を合わせた五人がその核心であったと述べている[3)]。鄭を除く、四人が早い時期に死亡・消息不明となったので、鄭の証言は貴重である。しかし、鄭の証言は慎重に検証しなければならない。先行研究は鄭の証言をそのまま利用し、鄭の見方による朝鮮民俗学会像をつくってしまったのではないか、と筆者は危惧している。鄭が学会の発起に深く関わったことは事実であるが、機関誌『朝鮮民俗』には第一号のみに寄稿してお

写真１　左から宋錫夏、村山智順、赤松智城、今村鞆、秋葉隆、孫晋泰、金斗憲（韓国国立民俗博物館提供）

り、少なくとも 1938 年以後は、鄭に代わり、金斗憲が核心メンバーになったのではないかと思われる。後述したように、『藝術年鑑』（1947）には朝鮮民俗学会委員として宋と孫に次に金の名が明記されており、解放後まで続いた。写真 1 は国立民俗博物館（ソウル）所蔵のもので、1938 年 3 月 5 日土曜日の京城の有名料理店太西館で撮った記念写真である。中央の今村を中心に、左から宋錫夏、村山智順（1891 ～ 1968）、赤松智城（1886 ～ 1960）、中央の今村、秋葉、孫、金斗憲（1903 ～ 1981）が夕食会に列席している[4)]。全京秀の研究によると、この会合は、赤松、秋葉、今村、村山諸氏の出版記念及び民俗談話会である。この会合で 1939 年今村の古稀について話し合い、それと共に『朝鮮民俗』第三号（今村古稀記念）を出すことが提案された可能性もある。それを証明するかのように、この会合のメンバーは、『朝鮮民俗』第三号の中心的執筆陣を成している［全京秀 2012：46-49］。

孫晋泰の「抱川松隅里長性調査記」には、1934 年 10 月に「畏友宋錫夏、城大教授赤松智城、秋葉隆等三氏とともに」［孫晋泰 1936］長性[5)] を調査したと記録されている。写真でも松隅里長性調査でも赤松智城が入っていることから、五人の他に、核心メンバーに赤松智城を含めても支障はないかも知れない。

Ⅱ　先行研究の検討

1　宋錫夏、孫晋泰の評価をめぐって

朝鮮民俗学会の成立とその活動を考察することは、朝鮮民俗学会の核心メンバーに対する評価とも深く結びついている。特に孫晋泰と宋錫夏に関する学史の評価は、肯定論と否定論が厳しく拮抗しており、その評価の延長線上で朝鮮民俗学会の性格規定をめぐる先行研究においては、激しい意見の対立が存在する。筆者は本稿を執筆するに当たって、朝鮮民俗学会の成立とその活動を評価する作業が、孫晋泰・宋錫夏評価の延長線上にあることを深く自覚している。その一方で後述するよ

うに、従来の研究が孫晋泰と宋錫夏の業績すらもまともに整理せず、性急に彼らを評価してきた側面が強いという問題を痛感している。筆者は先行研究において、孫晋泰の郷土へのまなざしは、常に揺れ動くもので、多様な側面があると指摘し、否定・肯定を実証的に乗り越え、等身大としての孫の学問を見直して、植民地知識人としての彼の悩みを浮き彫りにする必要性を説いた。孫に関する基礎作業として30種余の論考、40種余の新聞記事を新たに発見して「孫晋泰著作目録」を作成してきた［金広植2006，2007，2012：47-60］。

1981年には李基白（イ キ ベク）により『孫晋泰先生全集』全6巻（太学社）として不完全な形で著作の一部が収められたが、その一方、宋錫夏全集や著作目録は永い間、整理されていない。2004年に「石南宋錫夏誕辰100周年」を記念して『石南　宋錫夏―韓国民俗の再吟味』上・下（韓国国立民俗博物館）が刊行されたものの、書誌の間違いが際立っている。未だに資料調査による宋錫夏著作目録さえも作成されていない状態である。そこで筆者は、本稿の作成に臨み、「宋錫夏著作目録」（文末を参照）の作成から取り掛かった。

まず、孫晋泰と宋錫夏に関する先行研究を、孫を中心にまとめたい。解放後、金容燮（キムヨンソプ）は「南滄（孫晋泰の号―筆者注）が到達した民族史の理論は、対内的には民族を構成する全社会階級の矛盾関係と意識の問題を社会発展の体系の中で認識し、対外的には我が民族の他民族に対する闘争と文化交流を通した民族文化の成長を、対内問題としての社会発展の論理と連結させてそれを全民族の成長発展という体系の中で展開しようとするものであった。言い換えれば、民族成長の論理と社会発展の論理を一つに総合することによって、我々の歴史をより幅広い民族史として捉えようとするものであった」［金容燮1976：493］と孫の新民族主義史学を高く評価した。その後孫の学問は、帝国日本に対抗した「韓国民族主義史学」の流れを受け継ぐものとして位置づけられてきた。一方、民俗学からの評価として李弼泳（イ ピルヨン）は「民俗を中心とした民族文化に関する孫の関心は、1940年代の太平洋戦争を前後にして当時の民族主義史学、実証主義史学、社会経済史学を批判・克服しそれを総合した新民族主義史観として展開し、彼はそれに立脚して新しい韓国民族史を構想した」として、孫の学問を「歴史民俗学」、「民族文化学」と位置づけている［李弼泳2003：96］。

しかし従来の研究は、解放後の孫の著作を中心とした分析がほとんどであり、解放前に発表された日本語論文に関する具体的な分析なしに、解放後の論文を以って解放前の孫を評価するという問題を抱えていた。それに対して南根祐は、従来の研究史における「孫晋泰学」の成立背景とその性格に対して批判的にアプローチしている。まず、早稲田大学史学科在学時代の西村眞次（1879～1943）の民族学と津田左右吉（1873～1961）の実証主義史学からの学問的影響と、東洋文庫在職時代の白鳥庫吉（1865～1942）との関係を分析してから、1920年代半ばから1930年代半ばにかけての孫が旺盛に展開した民族文化論を批判的に検討している［南根祐1996］。次に「孫晋泰の民族文化論と満鮮史学」の中で、孫は檀君肯定論をセンチメンタルな民族主義だと批判して、白鳥・津田の実証史学と西村の文化史的方法に自分の現地調査を結合して旺盛な民族文化論を展開したが、孫の文化論を丁寧に調べてみると、檀君否定論以外にも満鮮史学と幾つか相通じる点がある。また「孫晋泰は白鳥をはじめとした満鮮史学者たちと人脈上で近かったのみならず、学問的にも彼らから少なくない影響を受けた」［南根祐1998］と指摘している。次に「‘土民’の‘土俗’発見と‘新民族主義’」では、火田民に関する孫の関心と言及を中心に検討して、火田民に関する1920年代の浪漫的関心は、1930年代に入り現在的関心に転換されたとして、火田民の生活に関する関心よりは累木家屋のような古俗の残存物を採集するために火田民の村を訪ねた孫が発見したのは、苦しく暮らしている火田民ではなく、犬の仔、豚の仔と同居している「土民」だったと指摘する。南は、従来の研究で一般化された「民衆」の発見者としての孫晋泰像を実証的に見直してい

る。南の批判は孫晋泰に留まらず、後述するように宋錫夏が尽力した民俗芸術振興における政治的な脈略を検証している［南根祐 2004a］。

南根祐の論考は、従来の研究傾向とは異なるものであり、「この発表には年配の研究者から激しい質問やコメントが出されたが、それらは筆者（中生）の見るところイデオロギー的な観点からの批判であり、発表の根幹にかかわる議論とはならなかった」［中生勝美 2004：103］といえる。実際に、南を批判する論者が論拠として提示している文献は、ひたすら解放後に書かれた孫の論文を引用し、解放前の孫を擁護するに留まっている。このように解放後の著作のみを根拠にして解放前の孫の業績をたたえる研究は、大いに説得力を欠くと言わざるを得ない。車承棋（チャスンギ）は、南根祐の一連の批判的な研究は「孫晋泰に関する既存の評価に含まれた民族主義的イデオロギーを取り除き、孫の‘実体’にアプローチしていく方向でなされている」と評価しながらも、「しかし既存研究において歪曲されたり、誇張された‘孫晋泰像’を修正する方向で研究が展開することによって、ややもすれば通説の反対側に孫晋泰の‘実体’というもう一つの異なる像を構築する結果を生み出す可能性もなくはない」［車承棋 2009：133］と注意を喚起している[6)]。 南の問題提起に対しては、イデオロギー的で感情的な批判ではなく、解放前後に書かれた孫の日本語と朝鮮語文による論考を緻密に対照・分析する作業が求められる［金広植 2006］。

2　朝鮮民俗学会の成立について

つづいて民俗学史の中の孫晋泰と宋錫夏の位置づけを概括しておく。張哲秀（チャンチョルス）は解放後の 1964 年から 1995 年までに韓国で公刊された民俗学研究史における時期区分を整理しているが、それによると、李杜鉉（イトゥヒョン）・印權煥（インクォンホァン）など代表的な研究者が 1920 年代を民俗学の形成期、1930 年代を定立期として位置づけている［張哲秀 1996：47］。このような時期区分は、趙芝薫（チョジフン）、崔吉城（チェキルソン）、金泰坤（キムテゴン）、朴桂弘（パクゲホン）などにも共通している［趙芝薫 1964：235-237；崔吉城 1970：132-134；李杜鉉他 1974：16-18；印權煥 1978：108-119；金泰坤編 1984：34；朴桂弘 1992：36-40］。これらの区分は、1920 年代までの李能和（イヌンホァ）と崔南善（チェナムソン）の文献中心の研究を民俗学の成立期に、現地調査を行った孫晋泰と宋錫夏の研究を定立期に位置づけるという共通点を持つ。

韓国で一般化されている 1930 年代における民俗学の確立という問題意識は、朝鮮民俗学会の成立と深く結びついているといえる。しかし、先行研究では朝鮮民俗学会に関する具体的な言及は少なかった。南根祐は、全京秀の論考は朝鮮民俗学会を本格的に論じた唯一無二の論文だと述べているほどである［南根祐 2004b：31］。しかし筆者が既に紹介したように、管見の限り、朝鮮民俗学会を論じた初めての論考は沈雨晟（シムウソン）によるものである［沈雨晟 1973；金広植 2006：28］。

沈雨晟は、孫と宋が中心となり、朝鮮「初の民俗学会を創り、機関誌「朝鮮民俗」を発刊することで名実共に民俗学の定着・定立を図るようになった」［沈雨晟 1973：7］と前置きし、前述した鄭寅燮の回顧を長く引用している。沈は朝鮮民俗学会の成立背景を述べてから、「朝鮮民俗」誌の内容を検討した。しかし日本人民俗学者の「植民地史観」、朝鮮人民俗学者の「民族愛」という二項対立的図式に立ち、朝鮮民俗学会は創立初期から得体の知れない「一部の不透明な日本人学者ら」に迎合し、結局は日本人の勢力に掌握されたと主張している［沈雨晟 1973：11-12］。

印權煥は「1930 年代の民俗学において、特記すべき事項は専門的学会の創立と研究誌の刊行であった」と指摘し、「朝鮮民俗」創刊辞および内容を検討し、韓国民俗学史における初の学会であり、初の民俗学専門学術誌だと評価した［印權煥 1978：122-125］。

梁永厚（ヤンヨンフ）は、朝鮮民俗学会の創設は「朝鮮民俗学の学問的定着を意味する節目となった」と指摘し、鄭寅燮の回顧、「朝鮮民俗」誌の内容、柳田国男との関わり、日本人学者の植民地民俗学の問

題を分析した。一方、韓国語論文「韓国民俗学小史」において、任東權（イムドングォン）が秋葉を「朝鮮巫俗の調査研究に専念されたアカデミックな学者で、朝鮮民俗学会の創設に発起人の一人」と評価したことに対し、秋葉の学問を支配のための植民地民俗学と規定して厳しく批判した［梁永厚 1981：141］[7)]。

川村湊は、梁永厚など先行研究の「『朝鮮民俗』の受難」という考え方に共感を示し、創刊辞と学会誌を検討し、第三号で今村古稀記念号を出したことを見ても、「日本化」傾向は否定できないと主張した。また、今村や村山などの「日本人の仕事に対する宋錫夏や孫晋泰などの朝鮮人学者たちの“眼差し（まなざし）”」に注目し、孫晋泰の村山書評を取り上げて孫晋泰の批判は、むろん村山智順の「植民地民俗学」（“日本語”民俗学）の根幹を突き、その本質面において批判したものだと述べている［川村 1996：43-46，55］。

これまでの論者は、日本人の朝鮮民俗学は日帝の植民地主義に奉仕した「同化主義的支配言説」であり、これに対して朝鮮人の民俗学は文化民族主義に立脚した「土着主義的抵抗言説」という単線的二分法に基づき、議論を展開しているといえよう［南根祐 2004b：30］。確かに植民地状況の中で失われる朝鮮民俗を捉えようとした朝鮮人民俗学者の苦悩とその実践を明らかにする作業は重要であるが、それは厳密な史料批判が前提にならなければならない。

一方、宋華燮（ソンホァソプ）は、「たとえ宋錫夏・孫晋泰が主導したとしても、日帝官学者らが相当数参加したこの学会（朝鮮民俗学会）は、植民地における民族の生活文化と他民族生活文化に対する学問的関心が植民地主義に便乗した土俗学および人類学的研究方法論から大きく脱していなかったのではなかろうか」と批判するのみで、詳細は論じていない［宋華燮 2011：249］。

全京秀は、日本人と朝鮮人学者という二分法を乗り越え、三分法を打ち出しており注目される。全京秀は、宋錫夏など朝鮮人文化運動の在野派、今村・村山など朝鮮総督府嘱託の官房派、孫晋泰・秋葉などアカデミズムの講壇派を統合した実体として登場した「朝鮮民俗学の統合力」に注目する。すなわち、朝鮮民俗学会の主要メンバーをみれば、この集まりは相当包括的であり、狭い意味の民俗学を越えた人類学者を含んでいる。会員の年齢も多様で、日本人も含んでいる。在野と講壇そして官房も包括することで、それこそ広い意味の人類学的な傾向を目指していたと位置付けている。また、学会誌の内容を検討し、学会誌が季刊として定期的に発行できなかった理由として、財政難、宋の病気、原稿不足、朝鮮人主導の『震檀学報』の刊行を挙げた。そして「今村古稀記念」三号を出して終わった状況を、川村の「日本化」に対し、「日帝化」という用語を提案している［全京秀 1999：86-94］。

朝鮮民俗学会に関する最も具体的で実証的な研究は、南根祐によって行われたが、南は支配のための日本人民俗学と抵抗のための朝鮮人民俗学という素朴な二分法を全面的に見直している。南根祐の論考「朝鮮民俗学会再考」の本論は、「Ⅱ.朝鮮民俗学会以前、Ⅲ.朝鮮民俗学会の創立と活動、Ⅳ.朝鮮民俗学と植民地主義」に構成されているが、〈Ⅱ〉と〈Ⅲ〉では、宋・孫・鄭および秋葉の民俗学会への思惑と、1920 年代からの研究動向を丹念に拾い集めて、朝鮮民俗学会の成立背景を実証的に分析している。南根祐は、学会誌が定期的に刊行できなかった理由には、全京秀が重視した財政難、宋の病気よりも、「原稿問題が主な原因」と指摘している。つまり、「研究者層が薄く原稿が集まらない不可避な現実」と 1934 年 11 月に創刊した震檀学会の「『震檀学報』がその機能的代替物としての役割を果たしたことをもう一つの理由」と指摘している［南根祐 2004b：50-54］。原稿問題は「朝鮮民俗」一号と二号の宋の「編輯後記」をみても分かる。実際に「朝鮮民俗」一号は 46 頁、二号は 82 頁に留まっている。

南根祐は、〈Ⅳ〉では、「朝鮮民俗」誌の「日本化」「日帝化」などの「‘主導権’交代と捉える見

解も‘過剰批判’と思われる」として、第三号の編輯を秋葉が担当した「一回のイベント」に過ぎないと解釈した。確かに第三号の編輯以降に、秋葉が朝鮮民俗学会を代表した痕跡はないので、六年ぶりに今村の古稀を記念して日本語で刊行された一回のイベントを拡大解釈する必要はないであろう。南根祐が重要視する論点は、第三号に掲載された論文の内容にある。先行研究が朝鮮人論文の抵抗民族主義を論じたのに対して、日鮮同祖論に基づいた植民地主義が内在する今村、家族主義を強調した秋葉、原始的精霊信仰に留まっていることを強弁する村山の論考と共に、李朝時代以来の停滞した朝鮮連坐制を論ずる金斗憲の論考を批判的に検討している。

南根祐の問題提起は、朝鮮民俗学会をめぐる従来の無難な二分法的な解釈を乗り越えて、交錯する植民地主義の問題点を喚起している。先行研究では鄭寅燮の回顧を中心に朝鮮民俗学会の創立背景を概観するのみで、当時の新聞・雑誌などを取り上げて、その事実関係を検証する作業はなされていない。そこで、以下では、鄭寅燮などの証言を批判的に検証し、同時代の新聞・雑誌記事を取り上げる。また、朝鮮民俗学会の成立とその会員を明らかにし、学会および会員の活動を考察したい。

Ⅲ　朝鮮民俗学会の成立、会員とその活動

1　朝鮮民俗学会の創立と会員

朝鮮民俗学会が創立する前までの宋・孫・鄭および秋葉の民俗学会の必要性に関する共感については、南根祐が詳しく論じているので、本稿では、朝鮮民俗学会の成立時期からを検討対象にする。

朝鮮民俗学会の成立時期および会員の全貌をめぐる具体的な分析はなされていない。解放直後の『藝術年鑑』（1947）における学術団体名簿では【朝鮮民俗学会】を以下のように記載している。

所在　ソウル市桂洞七二番地
創立　一九三二年四月
委員　宋錫夏（代表）　孫晋泰　金斗憲
沿革及び研究状況　○機関紙「朝鮮民俗」発刊　○展覧会開催　○朝鮮郷土舞踊民謡大会開催　○英国及び其の他の諸国学界と聯結交詢
趣旨　民俗学に関する資料の採採及び蒐集を行い、民俗学知識の普及及び研究者の親睦交詢を主にして、選んで外国学会との聯絡及び紹介を行う。
会員　五十名　［藝術新聞社編 1947：148］

宋錫夏は 1948 年 8 月に亡くなるので、この記録は朝鮮民俗学会に関する公式的な最後の記録といえるが、会員は 50 名に留まっている。かつて宋は『朝鮮民俗』創刊号の「編輯後記」に「会員二百名だけいれば経費に非常に力になる」と述べたが、それは果たせぬ夢になってしまった[8)]。創立は 1932 年 4 月と明記されており、『朝鮮民俗』創刊号の「編輯後記」も同じなので、創立時期は 1932 年 4 月といえる。それは当時の朝鮮語新聞でも確認できる。『朝鮮日報』は 1932 年 4 月 16 日夕刊に、『東亜日報』は 21 日に、『中央日報』は 22 日に朝鮮民俗学会創立に関する記事を報じた。『朝鮮日報』の 4 月 16 日夕刊が最も早く報じており、夕刊であることを考えると、記事からは創立の催しがあったかどうかは不明であるが、あったとすれば催しは 4 月 16 日土曜日午前中に行われたと思われる。

『中央日報』は「民俗学会機関紙　朝鮮民俗発行」という見出しで、

（前略）朝鮮学界において重要な意味を持つ民俗学の研究と発表の機関がないことを遺憾に思い、斯界の造詣が深い宋錫夏氏他六氏「朝鮮民俗学会」を発会した後、「朝鮮民俗」という機関紙をきたる五月初め頃から発行するという。同事務所は安国洞五十二番地である。

と伝えている。発起人は「宋錫夏氏他六氏」となっている。『朝鮮日報』には、六氏は「孫晋泰　白樂濬　李瑄根　崔瑨淳　兪亨穆、鄭寅燮」であると明記されている。『朝鮮日報』は『朝鮮民俗』の「準備に着手したが、編輯は宋錫夏氏が担当」すると報じ、1933 年 2 月 2 日の読書欄に咸大勳（1906～1949）の「『朝鮮民俗』を読む」という 4 段の書評を載せている。また『東亜日報』も同様に、

（前略）学界人士らが今般朝鮮民修学会を発起して一般の入会を歓迎するとして、五日には機関誌「朝鮮民俗」を発行する予定で、発行所は安国洞五二で、編者は当分の間、宋錫夏が担任するという。発起人は孫晋泰、白樂濬、李瑄根、崔瑨淳、兪亨穆、鄭寅燮、宋錫夏。

と報じているので、三つの朝鮮語新聞だけをみると、7 人の朝鮮人で朝鮮民俗学会が創立されたことがわかる。それは後述する内地の雑誌『ドルメン』でも確認できる。

先述した鄭の証言とは異なって、1932 年 4 月の発会は朝鮮人のみでスタートしたと思われる。秋葉などの日本人学者が参加したのはそれ以後である。朝鮮語新聞がいずれも 1 段の短い紙面に留まっているが、『大阪毎日新聞』朝鮮版の 1934 年 2 月 13 日には「燦然たる文化を紹介　理解を持たせる　生れ出た『朝鮮民俗学会』」という見出しの 2 段記事があり、注目される（資料 1）。

（前略）内外に朝鮮文化の異色を紹介するとともに斯界の大家達に研究資料を提供し併せてその芸

資料 1　『大阪毎日新聞』朝鮮版（1934 年 2 月 13 日、6 面）

燦然たる文化を紹介
理解を持たせる
生れ出た『朝鮮民俗學會』
機關誌に研究論文

（京城發）かつては燦然たる光芒を放つた朝鮮文化、いまは時の潮とともに殆ど滅び霧され埋れ果てた朝鮮色豊かな、その郷土文化の片鱗をば、古刹から墓墳から名もない民家の穴ぐらから、くちずさみ傳へられた民謡、童謡、説話のうちから拾ひ集めこれを研究發表して内外に朝鮮文化の異色を紹介するとともに斯界の大家達に研究資料を提供し併せてその藝術、その風俗習慣を通じての、よき理解と握手を意圖せんとする内鮮人類學の士の眞面目な集ひができた

即ち朝鮮假面研究大家宋錫夏氏東京學士院で研究中の史家孫晋泰氏、城大社會學教授秋葉隆氏李王職雅樂部の雅樂研究家李鍾泰氏、朝鮮民謡、童謡研究の一人者金素雲氏、延禧專門文學部長白東濬氏、英文學の大家鄭寅燮氏、史學家李瑄根氏等々々斯界の權威者を網羅して『朝鮮民俗學會』――事務所京城府桂洞一三三――を組織し、それ〴〵蘊蓄を傾けて、すでに來る十五日ごろ創刊の運びに至つてゐる機關誌は朝鮮民俗會から各方面にわたつての純朝鮮色の薫り高い研究論文を掲げて世に問はんとしてゐるが既に日本民俗學會初めアメリカ、イギリス、ドイツその他各國の民俗學會と連絡を取つてあり、福利を離れた純學究的な團體であるだけに異常な注目と期待がかけられてゐる

術、その風俗習慣を通じての、よき理解と握手を意図せんとする内鮮人篤学の士の真面目な集ひができた。

即ち朝鮮仮面研究大家宋錫夏氏　東京学士院で研究中の史家孫晋泰氏、城大社会学教授秋葉隆氏　李王職雅楽部の雅楽研究者李鍾泰氏、朝鮮民謡、童謡研究の一人者金素雲氏、延禧専門文学部長白東濬（正しくは白樂濬　―筆者注）氏、英文学の大家鄭寅燮氏、史学家李瑄根氏等々々

斯界の権威者を網羅して『朝鮮民俗学会』― 事務所京城府桂洞一三三 ―を組織し、それぞれ蘊畜を傾けて、すでに来る十五日ごろ創刊（創刊号は1933年1月に出ており、正しくは第2号である。当初第2号は2月に出る予定だったが、おくれて5月に出た――筆者注）の運びに至つてゐる機関誌は朝鮮民俗会から各方面にわたつての純朝鮮色の薫り高い研究論文を掲げて世に問はんとしてゐるが既に日本民俗学会初めアメリカ、イギリス、ドイツその他各国の民俗学会と連絡を取つてあり、福利を離れた純学究的な団体であるだけに異常な注目と期待がかけられてゐる[9)]。

『大阪毎日新聞』朝鮮版の記事には、朝鮮語新聞で報じた7人の発起人以外に、秋葉隆、李鍾泰、金素雲を取り上げている。『朝鮮民俗』創刊号の46頁には「寄贈雑誌名」が次のように記録されている。

郷土風景（同社）
ドルメン（岡書院）
安藝國（安藝郷土研究会）
英語文学（同社）

これらの寄贈雑誌は、宋の個人的な付き合いに関わっていると思われ、今後さらなる研究が求められる。文末の「宋錫夏著作目録」にも示したように、宋は1935年に相次いで大阪の住吉土俗研究会刊行の雑誌『田舎』と単行本『案山子考』に論文を寄せている。

『英語文学』は鄭寅燮が中心となって京城で1932年6月に創刊した雑誌である。『郷土風景』（1932. 3-1935. 10、2巻10号から『郷土藝術』に改題）は久米龍川主宰、谷川要史編輯兼発行の雑誌で、3巻8号に宋の「朝鮮の民謡と舞踊」、3巻9号に孫の「天下大将軍の話」が掲載されたが、いずれも1934年7月に『大阪毎日新聞』朝鮮版「半島新人集」に連載したものと同じである。『郷土風景』にも『安藝國』（広島、安藝郷土研究会）にも朝鮮民俗学会に関する具体的な紹介は見当たらない。同時代の『郷土研究』（郷土研究社）、『民俗学』（民俗学会）、『旅と伝説』（三元社）、『人類学雑誌』（東京人類学会）にも朝鮮民俗学会に関する記事は見当たらず、『民俗学』5巻2号（1933年2月）の「学会消息」と『旅と伝説』6年3号（1933年3月）の「新刊寄贈書目」に創刊号の目次が紹介されているのみである。

朝鮮民俗学会に関して最も詳しく紹介したのは『ドルメン』（1932. 4-1935. 8, 1938. 11-1939. 9）である。『ドルメン』は『朝鮮民俗』一号と二号の目次紹介のみならず、1巻4号（1932. 7）「学界彙報」で「朝鮮民俗学会の創立」を伝えて、上記の朝鮮語新聞における7人とともに李鍾泰を追記している。また宋を幹事と紹介している。続いて2巻4号（1933. 4）「朝鮮民俗学界への展望」で岩崎継生は、当時の朝鮮民俗学界を概略し、近頃民俗学に対する学的関心が高まっているが、その中心は秋葉、高橋亨（1878～1967）らを中心とした京城帝国大学と、村山智順、善生永助（1885～1971）、小田内通敏（1875～1954）らを中心とした朝鮮総督府の調査と研究だと主張した。その一方、民俗学は大学研究室や官庁よりは、各地の有識具眼の人士により、一

層の効果を挙げることが出来ると指摘し、今村鞆、鮎貝房之進（1864～1946）とともに、「日本民俗学に於ける中山太郎氏を彷彿たらしむる」朝鮮民俗学の第一人者として、李能和を挙げた。また、東京には孫晋泰がいると指摘し、1933（マ）年1（マ）月に「朝鮮民俗学会」が孫晋泰、宋錫夏らを中心に組織され、活発に活動していると結んでいる［岩崎 1933：112-115］。岩崎は『朝鮮民俗』が創刊された 1933 年 1 月を発会と述べているが、前述した通り、学会は前年の 4 月に創立された。

4 巻 1 号（1935. 1）「学界彙報」では「朝鮮民俗学会幹事移動」を伝えている。

> 同会の常任幹事たりし宋錫夏氏が十二月以降京城より居を朝鮮忠清南道瑞山郡海美面堰岩里に移転せし為め、後任として孫晋泰氏（編輯）李鍾泰氏（庶務）が選定され、京城府桂洞一三三にて執務する事に決定した。

つまり、宋は 1932 年 4 月朝鮮民俗学会創立以来、常任幹事として編輯を担当してきたが、1934 年の年末に後任の孫晋泰（編輯）と李鍾泰（庶務）に一時変更された。しかし、1934 年 5 月『朝鮮民俗』二号発刊後、孫の編輯によって機関誌が出ることはなかった。

前述したとおり、1932 年 4 月頃、孫は東京に滞在していた。孫が「朝鮮民俗資料の採訪」のために「東京を発」ったのは「五月初旬」［孫 1933：36］なので、孫は 5 月半ばに京城を訪ね、宋と鄭に会って、朝鮮民俗学会創立に関する事後報告に接したことになる。全京秀の指摘通り、朝鮮民俗学会の創立において宋が「主」であり、孫は「客」であった［全京秀 1999：86］。

次の『朝鮮民俗』一号と二号に載せられた「朝鮮民俗学会々則」は、川村の指摘通り、秋葉も委員を歴任した『民俗学』の「民俗学会会則」を引き写したものにほかならない［川村 1996：41］。

> 第一条　本会は朝鮮民俗学会と称する。
> 第二条　本会は民俗学に関する資料の採採及び蒐集を行い、民俗学知識の普及及び研究者の親睦交詢を主とし、並びに外国学会との聯絡及び紹介を行う。
> 第三条　本会の目的を達成するにおいて左記事業を行う。
> 一　機関誌『朝鮮民俗』を発行する。
> 二　時々例会及び講演会を開催する。
> 第四条　本会々員は本会趣旨目的を賛同して会費前納した者に限る。
> 第五条　本会々員は本会及び講演会に参席でき、雑誌を無料受覧の権利を有する。
> 第六条　本会事業を遂行するために会員中、若干名の委員を置き、委員は会員中の互選に拠る。
> 第七条　委員の中幹事を選び、編輯会計庶務を担当する。幹事及び其の数は委員が決定する。
> 附則
> 本会の決議に依って本会則を変更できる。

前述した通り、宋は常任幹事、即ち実質的な代表として編輯を担当し、会計庶務は李鍾泰が担当したと思われる。宋は『朝鮮民俗』一号と二号を出してから 1934 年末に忠清南道瑞山に行くことになり、一時期編輯を孫に頼んだが、孫が編輯した機関誌は刊行されなかった。1935 年も 1936 年も三号は出ず、会費を前納することもなくなった。会員の任晳宰（1903～1998）は、「今日のように会員年会費のようなものもなかった。行事がある時互いに連絡して集まった。その時の各参席者はその日の会費を出して会食費用に当てた。この当時（1930 年代　―筆者注）の参加者としては孫晋泰、宋錫夏氏などで、日本人としては秋葉、赤松智城、村山智順氏などがいた」と証言してい

る［任 1992：9］。実際に『朝鮮民俗』に収録された論文の目次は、以下の通りである。

『朝鮮民俗』第一号、1933 年 1 月
孫晋泰「柱考」
秋葉隆「巨濟島の立竿民俗」
宋錫夏「五廣大小考」
鄭寅燮「晋州五廣大탈ㅗ름（仮面劇）」
孫晋泰「江界의　正月歳事」
S. Ha Sohng「The reference Books on Korean Folklore」
「去年度各雑誌掲載朝鮮民俗学関係文献」

『朝鮮民俗』第二号、1934 年 5 月
秋葉隆「村祭の二重組織」
孫晋泰「江界採蔘者의　習俗」
金文卿「出産に関する民俗―京城を中心として―」
宋錫夏「東來野遊台詞」
連榮嬅「成川民俗　二三」
韓基升「婦謠女子嘆」
L. G. Paik「Korean Folk-Tales and its Relation to Folk-lores of the West」
S. Ha Sohng「The reference Books and Materials on Korean Folk-lore」
「去年度各誌掲載朝鮮民俗学関係文献」

『朝鮮民俗』第三号（今村翁古稀記念）、1940 年 10 月
今村鞆「民俗学と小生」
柳田國男「学問と民族統合」
鮎貝房之進「還暦と厄年」
赤松智城「濟州島俗信雑記」
秋葉隆「所謂十長生に就て」
村山智順「陰宅の發福に就て」
孫晋泰「蘇塗考訂補」
金斗憲「李朝時代に於ける連坐の刑に就て」
任晳宰「朝鮮の異類交婚譚」
宋錫夏「社堂考」
孫晋泰「髄聞録」
今村鞆翁著作目録
書評

前述した朝鮮人 7 、 8 人の発起人のうち、原稿を執筆したのは、孫と宋を除いては英文を投稿した白樂濬、鄭寅燮の資料のみである。その一方、孫は論文と資料を合わせて 5 編、宋は論文と英文資料を合わせて 5 編、秋葉は論文 3 編を投稿した。これは延べ 25 編の論考の中、半分以上の 13 編に当たる。『朝鮮民俗』の核心メンバーは、宋・孫・秋葉であったといえよう。

表１　孫晋泰の論考数　（同じ言語の重複論文、書評、設問は除外、（　）の中はそのうちの単行本数）

年度	1930	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	合計
数	7(2)	10	8(1)	20	10	7	12	1	1	2	4	3	—	—	—	85

表２　宋錫夏の論考数　（同じ言語の重複論文、書評、設問は除外、連載は一つにカウント）

年度	1930	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	合計
数	—	—	2	9	14	12	10	12	10	10	4	5	1	2	1	92

上記の２つの表は、1930 年以降の孫と宋の書評と設問を除いた論考数をまとめたものである。宋の論考には新聞寄稿が多く、原稿の内容および長さなどもあり、単純比較は難しいものの、1933 年までは孫の論考が圧倒的に多かったが、1934 年からはそれが逆転したことが分かる。1931 年 5 月 8 日付の『東亜日報』は宋が江原道鉄原で貴重な資料を発見したことを伝えたが、宋を「隠れている民俗学者」と表現している。実際に文末の「宋錫夏著作目録」のように宋は、『民俗朝鮮』が創刊されるまでは 1926 年 11 月の「慶州邑誌に対する私見」（『東亜日報』）、1929 年 4 月の「朝鮮の人形芝居」（『民俗藝術』）、1932 年 8 月の「朝鮮の民俗劇」（『民俗学』）、同年 9 月の「南方移秧歌」（『新朝鮮』）の 4 つの論考しか発表していないが、『朝鮮民俗』創刊号の出る 1933 年から多くの論考を相次いで発表した。

２　朝鮮民俗学会（会員）の活動

先行研究では、「1932 年に朝鮮民俗学会が結成され 1940 年 10 月に学術誌を三号まで刊行し、日帝末期の戦乱と政治的弾圧によって 1945 年解放になるまで全ての活動が中断された」とされてきた［金泰坤編 1984：35］。確かに『朝鮮民俗』の発刊だけをみるとその通りであるが、本稿では出来る限り朝鮮民俗学会および会員の活動を探ってみたい。

筆者は孫晋泰・宋錫夏が書いた多くの論考の原文を確認したが、朝鮮民俗学会の会員と名乗った論考は『観光朝鮮』（1939. 6-1944. 12、日本旅行協会朝鮮支部、3 巻 1 号から『文化朝鮮』に改題）を除いて接することができなかった。孫の場合は普成専門学校の教授であったことも影響したと考えられるが、特定の所属がなかった宋の場合も「朝鮮民俗学会員」と名乗った記録は、『観光朝鮮』及び座談会の記録を除いては見当たらない。

まず、『観光朝鮮』に掲載された朝鮮民俗学会の会員と明記された肩書きを取り上げておく。

1 巻 1 号（1939 年 6 月）金素雲「朝鮮民謡の吟味」（朝鮮民俗学会員、民謡研究家）
1 巻 2 号（1939 年 8 月）朝鮮民俗夜話
秋葉隆「神女綺譚」（城大教授・朝鮮民俗学会員）
宋錫夏「民俗舞踊瑣談」（朝鮮民俗学会員）
金素雲「「ことわざ」雑記」（朝鮮民俗学会員）
1 巻 3 号（1939 年 10 月）宋錫夏「朝鮮の仮面演劇舞踊」（朝鮮民俗学会員）
眞木琳「朝鮮小話　松山鏡」（朝鮮民俗学会員）
眞木琳「朝鮮小話　馬鹿婿」（朝鮮民俗学会員）
2 巻 1 号（1939 年 12 月）今村鞆「朝鮮の正月行事記」（朝鮮研究者）
眞木琳「朝鮮小話　歯の抜けた小麦粉」（朝鮮民俗学会員）
2 巻 6 号（1940 年 11 月）今村鞆「朝鮮ちげ風景」
3 巻 4 号（1941 年 7 月）『済州島』特輯

今村鞆「済州島を語る」（朝鮮民俗学研究家）
秋葉隆「済州島の民俗」（京城帝国大学教授）
4巻5号（1942年12月）「座談会　朝鮮の豊年踊を語る」
秋葉隆（城大教授）孫晋泰（普成専門教授）宋錫夏（朝鮮民俗学会員）今村鞆（同）

上記のように、秋葉・宋・金素雲・今村・眞木琳（平北宣川の信聖学院教員）が朝鮮民俗学会員という肩書きを使っている。眞木琳は、1938年『朝鮮』（朝鮮総督府）に「朝鮮の説話」を4回連載したこともある任晳宰である［崔来沃他1991：193］。『観光朝鮮』は1巻1号から笑話（小話）に関心を示し、「朝鮮の笑ひ話　ノンベ二人酒屋」などを連載した。また、1巻3号から2巻6号までは「朝鮮小話」というタイトルで10余りを連載しており、その中で「松山鏡」、「馬鹿婿」、「歯の抜けた小麦粉」だけが眞木琳執筆と明記されているが、残りのものも任晳宰の執筆である可能性が高い。

金素雲は「ソウル竜山鉄道が「観光朝鮮」というかなり分厚い大型の雑誌を発行していた。2回ほど頼まれて原稿を書いたことがあった」［金素雲1989：259］と回想するのみであるが、2回の原稿とも「朝鮮民俗学会員」という肩書きになっている。1巻1号から2巻1号まで毎号朝鮮民俗学会員の記事が乗せられたが、2巻2号からは「朝鮮小話」を除いては連載が止り、その後4 巻5号の「座談会　朝鮮の豊年踊を語る」が載せられている。注目すべきは、1巻2号の小特輯「朝鮮民俗夜話」という見出しの中で掲載された3つの論文である。1巻2号の「編輯後記」には

> 秋葉隆、宋錫夏、金素雲三氏の『朝鮮民俗夜話』は朝鮮民俗学者の研究余禄ともいふべきもの。半島を知る上に民俗の研究は重要な鍵の役割を持つ。我我は此の分野にも常に幾頁かを割きたいと思つてゐる。

と述べられており、初期の『観光朝鮮』は朝鮮民俗関連記事に関心を示したが、その後朝鮮民俗学会とそれ以上の関連を持つことはなかった。「朝鮮民俗夜話」が『観光朝鮮』編集部と秋葉との付き合いによるものか、宋との付き合いによるものかは今後検討しなければならないが、金素雲も含めての研究が求められる。

このように、朝鮮民俗学会は1939年を中心に「朝鮮民俗学会員」が寄稿を続けていたことを見過ごしてはいけないと思われる。南根祐の研究により、宋を中心とした民俗学会の活動の一端が分析されたが、それを時期別にまとめると以下のようになる［南2004a，2008，2009］。

1934年夏、内地「郷土舞踊民謡大会」に派遣する朝鮮豊年舞踊の更改を総督府に助言するも挫折。
1935年6月、朝鮮日報「農村娯楽の助長と浄化の具体的方案」寄稿
1936年1月1日、民俗の振作調査研究機関の提唱、朝鮮伝来娯楽・競技振興（『東亜日報』）
1937年5月17日、朝鮮民俗学会主催、朝鮮日報社後援「第1回朝鮮郷土舞踊民謡大会」
1938年4月25日―5月4日、朝鮮日報社主催「全朝鮮郷土演芸大会」の感想を寄稿
1938年11月―1939年5月頃、「鳳山仮面劇保存会」専門家的立場から指導

注目すべきは、宋と孫が参加した次の座談会である。

① 1937 年 7 月「鳳山仮面劇」(『朝光』3-7) 孫、宋、李鍾泰、咸大勳、盧子泳など
② 1937 年 8 月「朝鮮カラーを語る」(『朝鮮』267) 秋葉、玄櫶、宋、孫、稲川鉄道局旅客係長、村山など
③ 1938 年 1 月「鮮満の正月民俗を語る」(『朝鮮』272) 稲葉岩吉、今村、玄、孫、秋葉、呉晴、村山など
④ 1938 年 1 月 1，4，6 日「舊慣陋習打破」(『東亞日報』) 朴勝彬、徐光卨、李克魯、宋、孫貞圭など
⑤ 1941 年 4 月「朝鮮武藝と競技を語る」(『朝光』7-4) 宋、申鼎言、柳子厚、吳祥根、方鍾鉉など
⑥ 1942 年 12 月「朝鮮の豊年踊を語る」(『文化朝鮮』4-5) 秋葉、孫、宋、今村
⑦ 1944 年 4 月「農村娯楽振興」(『朝光』102) 秋葉、宋、玄濟明、孫、三木尚、重松中山など

①は朝鮮民俗学会主催の第 1 回「朝鮮郷土舞踊民謡大会」の成功を記念して 5 月 19 日午後 11 時から翌朝 1 時半までに渡り金閣園で酒を飲みながら行われた座談会で、朝鮮民俗学会側からは孫、宋、李鍾泰の三人が参加している。前述したように 1933 年 2 月 2 日付の『朝鮮日報』に『朝鮮民俗』書評を書いた朝鮮日報側の咸大勳は、座談会の冒頭で「民俗会(ママ)代表宋錫夏氏に委嘱して座談会は進行されます」とことわっている。②は秋葉、孫、宋が参加しているが、宋の肩書きは「朝鮮民俗学会主幹」となっており、⑤では「民俗学者である宋錫夏氏からお先におっしゃってください」という待遇を受けている。これらの座談会では秋葉はなるべく、宋と孫に朝鮮民俗事情を窺う形を取っている。多くの座談会が宋の主導で進められ、時には文化権力者として現場の演芸者に高圧的な指示をし、宋と孫の意見が食い違う場面も時々遭遇できる。これらの言説をめぐる各論者の共通点および差異点に関する具体的な分析は、今後の課題である。

Ⅳ　おわりに

1932 年 4 月、朝鮮民俗学会が発足してから 80 年が過ぎた。1990 年年代半ばまでに朝鮮民俗学会を取り扱った先行研究は、日本人民俗学者と朝鮮人民俗学者の二項対立を強調してきた側面が根強い。その一方で、近年、全京秀・南根祐などの研究によって、図式的な二分法を乗り越えようとする実証的な作業が進められている。本稿はこれらの成果に学び、先行研究では検討されなかった新聞・雑誌記事を具体的に検討した。その中で、はじめて「宋錫夏著作目録」を作成し、それに基づいて宋錫夏の学問の展開とその学会活動を考察した。

朝鮮民俗学会は機関誌『朝鮮民俗』一号を 1933 年に、二号を 1934 年に刊行し、その後、1940 年に秋葉隆編輯による「今村鞆古稀記念」三号を出すのみで、1945 年の解放まで全ての活動が中断されたという言説が主流であった。それに対して本稿では、出来る限り朝鮮民俗学会および会員の活動を探ってみた。1939 年を中心に朝鮮民俗学会員が『観光朝鮮』に民俗学関連論考を掲載しており、1937 年 5 月に朝鮮民俗学会が主催した第 1 回朝鮮郷土舞踊民謡大会などの実践をみても、先行研究の見方は再考が求められる。

南根祐は、宋錫夏と村山智順が目指した郷土娯楽振興論の類似点を強調している。筆者はその類似点とともに、宋錫夏・孫晋泰が目指した朝鮮民俗復興の言説と、他の朝鮮人および村山などが目指した言説の相違点に関する具体的な検討が求められると考えている。それに関する考察は今後の

課題である。

【追記】

本文にも言及したように、2012 年は朝鮮民俗学会創立 80 周年に当る。筆者は初稿を 2010 年 10 月に脱稿した。その後、韓国民俗学会の 80 周年記念「民俗学 80 周年を論ずる」（2012 年春季フォーラム、2012 年 4 月 20 日、国立民俗博物館）と「21 世紀における民の再解釈と民俗学』（2012 冬季国際学術大会、2012 年 12 月 7 日、ソウル大学校）の発表資料集を入手できた。実際の発表を聴いていないので、資料集の感想を簡略に述べたい。

「民俗学 80 周年を論ずる」には四つの論考が載せられている。学史を整理したものはなく、従来の二項対立の図式に立ち、民俗学の課題を論じている。同学会の会員でもある南根祐の問題提起に対する真摯な議論はなされていない。全京秀の指摘どおり、いずれも本筋であるはずの民俗学 80 年の過去を省察する作業は述べられていない。発表内容の中に朝鮮民俗学会について詳細な議論を行わず、主に民俗学 80 年の起源と未来志向の言説を論ずる方向で議論が拡散される傾向が強い［全京秀 2012：55］。

そこで全京秀は、2012 冬季国際学術大会で「朝鮮民俗学会と〈朝鮮民俗〉の植民「知」と隠抗写本―植民地混種性の可能性」という 46 頁に及ぶ長文のレジュメで学史を論じている。全は、朝鮮民俗学会と『朝鮮民俗』に関する検討は、植民地朝鮮における民俗学という学知の内容のみならず、植民地知識人の図式に関する検討にも繋がると前置きし、植民地解釈をめぐり、昨今熱い論争になっている収奪論と植民地近代化論に対するもう一つの代案として、植民地混種論（colonial hybridity）という概念を提示する。全は、収奪論も植民地近代化論も特定の史観を前提としており、植民地期を説明するための史料選択から、互いに異なる立場の相違を示すと指摘し、まずは帝国日本の中心部から影響を受けた側面を省察し、その延長線上に周辺部が経験した植民地知識人の自文化に対する関心が民族主義といかに結びついて展開したかを議論しなければならないと説く。

全は、可能な限り植民地期に展開された事実を有るがままに提示し、収奪論と植民地近代論の長所を結合・統合する立場を、植民地混種論と仮説する。またスコット（Scott, James C.）の Hidden Transcripts（隠抗写本＝隠された記章）を取り入れ、植民地検閲の問題に着目している。朝鮮民俗学会における朝鮮人の発会、その後の日本人の参加を混種性と捉え、監視と弾圧がより厳しくなる状況の中で、日本人を参加させたのは、朝鮮知識人が駆使した検閲対策用の Hidden Transcripts の一つであった可能性を示唆する。

全の論考は、近年の植民地検閲論を踏まえたものであるが、本稿では時間差により、十分に取り入れることが出来なかった。今後、1930 年代に展開される郷土娯楽振興論の中での宋と孫、他の朝鮮人、日本人の議論の同異を分析する作業などを通して検討していきたい。

注

1）詩人・英文学者の日夏耿之介とレイモンド・バントックが序文を寄せた朝鮮民譚集『温突夜話』は、1927 年 3 月 18 日に東京の日本書院から刊行され、同月 22 日には三版（東京都立中央図書館所蔵）を出すなど、大いに注目を浴びた。植民地期に日本語で刊行された朝鮮民間説話集については、拙稿「帝国日本における日本語朝鮮説話集の刊行とその推移に関する研究」（東京学芸大学大学院博士論文 2012 年）を参照。

2）鄭寅燮の回想には多少の間違いがあり、注意を要する。孫晋泰が普成専門学校に在職するのは 1934 年 9 月以降である。当時孫は日本に滞在しており、孫が「朝鮮民俗資料の採訪」のために「東京を発つたのは五月初旬

で」「平壌に着いたのは五月二十四日の早朝であった」[孫 1933：36]。孫は、1932 年 5 月半ばに京城を訪ねて、宋と鄭に会ったのではないかと考えられる。

3）鄭寅燮は、他の証言においても、宋錫夏は「かつて私（鄭寅燮）とは同郷人であり、ソウルに上京し「孫晋泰」と三人が朝鮮民俗学会を創設する際の宋の心身はひたすら一生をその方面に捧げたいということであった」と述べている［宋錫夏 1960：跋文］。

また鄭は「語文研究のほかに、宋錫夏、孫晋泰と共に韓国民俗学会を創立し、京城帝大の秋葉隆教授および韓国民俗研究者今村鞆氏をその客員として、民俗発掘に努力した」と述べている［鄭寅燮 1983：7］。

4）村山智順・赤松智城・今村・秋葉については、山路勝彦編 2011 とヨーゼフ・クライナー編 2012 を参照。

5）チャンスン：村の守り神、または里程標として上部に人の顔を彫って村の入り口や道端に建てた木製の標木。

6）車承棋は注釈において、南根祐の「一連の研究が孫晋泰と彼の学問‘全体像’を捉えようとする観点に基づいてなされている」と指摘して、南の議論の展開を評価している。確かに南の議論は、実証に基づかない先行研究をラジカルに批判し、反発を買った側面はあるものの、韓国民俗学界は、南の問題提起についてより真剣、且つ総力を尽くして、臨まなければいけないと筆者は考えている。

7）韓国語論文「韓国民俗学小史」の解放前は趙芝薫が、解放後は任東權（当時の韓国民俗学会会長）が担当している。任の解放前の言及は最小限に留まっているに過ぎないが、趙芝薫は次のように秋葉を評価している。「韓国民俗学に学的に大きな貢献を果たした日本学者は秋葉隆、赤松智城である。特に秋葉隆が京城帝大の社会学教授として宗教学の赤松教授と共に満蒙地方を踏査し、（中略）満・蒙・韓の巫俗を比較研究した各種著書と厖大な量に達する韓国民俗に関する論考は、その深化的方法による貴い業績として韓国民俗学の隆興に刺戟したところ大きいといえる。彼はまた孫晋泰、宋錫夏、鄭寅燮と手を組んで朝鮮民俗学会を創立した同人の一人である。同会の機関誌「朝鮮民俗」（1933）は、韓国民俗学を本軌道にのせておいたのである」［趙芝薫 1964：238］。

8）一方、1937 年 5 月に発起した「京城書物同好会」は、1943 年 4 月に「一六〇名の会員」に上ったが、その中には、秋葉・宋錫夏・金斗憲などが入っていた［桜井 1978］。桜井の名簿には孫晋泰の名はみえないが、孫は、『書物同好會會報』9 号（1940 年 9 月）の「今村鞆先生古稀祝賀記念特輯」に「朝鮮甘藷傳播說」を寄せており、会員だった可能性が高い。

9）『大阪毎日新聞』朝鮮版 1934 年 2 月 13 日 6 面。

参照文献

泉靖一・村武精一

1966 「朝鮮」『日本民族学の回顧と展望』日本民族学会編：258-265、民族学振興会。

岩崎継生

1933 「朝鮮民俗学界の展望」『ドルメン』2-4：112-115（満鮮特輯号）岡書院。

李基白編（韓国語文）

1981 『孫晋泰先生全集』全 6 巻、太学社。

李杜鉉・張籌根・李光奎（韓国語文）

1974 『韓国民俗学概説』民衆書館。

李弼泳（韓国語文）

2003 「南滄孫晋泰의　歴史民俗学의　性格」『南滄　孫晋泰의　歴史民俗学　研究』 韓国　歴史民俗学会編：95-128、民俗苑に再収録（『韓國學報』11-4、1985 年初出）。

任晳宰（韓国語文）

1985 「韓国巫俗　研究의　回顧」『比較民俗学』2 輯：3-21、比較民俗学会。

1992 「楊州別山臺놀이，鳳山탈춤，康翎탈춤　臺詞採録　過程에　대하여」『比較民俗学』9 輯：5-13、比較民俗学会。

任東權（韓国語文）

1964 「韓国民俗学小史　解放後」『民族文化研究』第 1 号：240-244、高麗大学。

印權煥（韓国語文）

1978 『韓国民俗学史』悅話堂。

川村湊

1996 『「大東亜民俗学」の虚実』講談社。

菊地暁

2010 「智城の事情―近代日本仏教と植民地朝鮮人類学―」『帝国の視角／死角―〈昭和期〉日本の知とメディア』坂野徹・愼蒼健編：80-111、青弓社。

金広植
2006 「植民地「郷土」を研究することの意味―朝鮮学、朝鮮民俗学、孫晋泰の再考―」『日本学報』25 号：23-44、大阪大学。
2007 「新民族主義史学における古代史の展開―解放前後の孫晋泰の認識を中心として―」『千里国際学園研究紀要』11・12 号合併号、90-106。
2012 「孫晋泰의　比較説話論考察―新資料発掘과　著作目録을　中心으로―」『近代書誌』5 号：45-70、近代書誌学会、ソミョン出版。
金素雲
1989 『天の涯に生くるとも』上垣外憲一・崔博光訳、講談社。
金泰坤編（韓国語文）
1984 『韓国民俗学原論』詩人社。
金容燮（韓国語文）
1976 「우리나라　近代　歴史学의　発達」『韓国의　歴史認識』下、李佑成・姜萬吉編：473-499、創作과　批評社、1976 年、初出は 1971 年。
国立民俗博物館編（韓国語文）
2004 『石南　宋錫夏―韓国民俗의　再吟味』上・下、国立民俗博物館。
藝術新聞社編（韓国語文）
1947 『藝術年鑑』藝術新聞社。
坂野徹
2005 『帝国日本と人類学者―1884-1952―』勁草書房。
桜井義之
1978 「解題」『書物同好会解放　附冊子』龍渓書舎。
沈雨晟（韓国語文）
1973 「「朝鮮民俗」誌의　考察　―朝鮮民俗学会의　背景을　中心으로―」『出版学』17：6-17、韓国出版学会。
1985 『民俗文化와　民衆意識』東文選。
1998 『民俗文化論　序論』東文選。
全京秀（韓国語文）
1997 「宋錫夏、朝鮮民俗学会、国立民族博物館、人類学科：民俗学에서　人類学으로」『民俗学研究』4：23-43、国立民俗博物館
1999 『韓国人類学　百年』一志社（『韓国人類学の百年』風響社、岡田浩樹，陳大哲訳、2004）。
2010 『孫晋泰의　文化人類学―帝国과　植民地　사이에서―』民俗苑。
2012 「朝鮮民俗学会와〈朝鮮民俗〉의 植民知와 隠抗写本 ―植民地混種性의 可能性―」『21 世紀 民의 再解釈과 民俗学』2012 韓国民俗学会 冬季国際学術大会 資料集、2012 年 12 月 7 日：15-60、韓国民俗学会。
孫晋泰
1933 「民俗採訪余録」『郷土研究』7-1：36-54、郷土研究社。
1936 「抱川松隅里長柱調査記」『朝光』2-2：246-249、朝鮮日報社。
宋錫夏（韓国語文）
1960 『韓国民俗考』日新社。
宋華燮（韓国語文）
2011 「日帝强占期　歴史民俗學의　胎動과　展開―孫晉泰　民俗學을　中心으로―」『南島民俗研究』23：235-267、南島民俗学会。
崔光植編（韓国語文）
2012 『우리나라　歴史와　民俗』南滄孫晋泰先生遺稿集、知識産業社。
崔吉城（韓国語文）
1970 「韓国巫俗研究의　過去와　現在」『文化人類学』第 3 輯：125-141、韓国文化人類学会。
崔来沃・崔柱賢（韓国語文）
1991 「가까이서　모시고　들은　任晳宰先生님의　逸話 20」『比較民俗学』7 輯：175-201、比較民俗学会。
車承棋（韓国語文）
2009 「‘土俗’의　発見과　民族文化의　構成―孫晋泰를　中心으로―」『日帝下　韓国社会의　伝統과　近代認識』 金度亨他：129-157、慧眼。
趙芝薫（韓国語文）
1964 「韓国民俗学小史　解放前」『民族文化研究』第 1 号：235-240、高麗大学。
趙ジョンウ조정우（韓国語文）

2008 「書評 ‘脱植民’民俗学의 構築을 위하여（南根祐,『‘朝鮮民俗学’과 植民主義』, 東國大学校出版部, 2008）」『社会와 歴史』78：337-346、韓国社会史学会。
張哲秀（韓国語文）
1996 「民俗学研究 50年史」『韓国学報』82：31-114、一志社。
鄭寅燮
1966 「朝鮮民俗学会―기억나는 대로（記憶を追って）―」『民族文化研究』第2号：185-192、高麗大学。
1983 『温突夜話』朝鮮民話集、三弥井書店
直江広治
1987 『民間信仰の比較研究―比較民俗学への道―』吉川弘文館。
中生勝美
2004 「《動向紹介》人類学と植民地研究―東アジアの視点から―」『思想』957：92-107、岩波書店。
中生勝美編
2000 『植民地人類学の展望』風響社。
朴桂弘（韓国語文）
1992 『増補 韓國民俗学概論』螢雪出版社。
南根祐
1996 「‘孫晋泰学’의 基礎研究」『韓国民俗学』28：85-121、韓国民俗学会。
1998 「孫晋泰의 民族文化論과 満鮮史学」『歴史와現実』28：212-253、韓国歴史研究会。
2003 「‘土民’의 ‘土俗’発見과 ‘新民族主義’」『南滄 孫晋泰의 歴史民俗学 研究』 韓国歴史民俗学会編：129-165、民俗苑。
2004a「実践的」文化ナショナリズムの虚実―宋錫夏の「朝鮮民俗学」を中心に―」『佛教大学総合研究所紀要』2004年別冊〔1〕：155-181。
2004b「朝鮮民俗学会 再考」『精神文化研究』27-3（通巻第96号）：29-66、韓国学中央研究院。
2008 『‘朝鮮民俗学’과 植民主義』東國大学校出版部。
2009 「民俗의 競演과 芸術化」『韓国文学研究』36：289-326、東國大学校。
2010 「朝鮮民俗学会の創立と活動」『植民地朝鮮と帝国日本』徐禎完・増尾伸一郎：109-124、勉誠出版。
山路勝彦編
2011 『日本の人類学―植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』関西学院大学出版会。
梁永厚
1981 「朝鮮民俗学の苦難」『伝統と現代』71：135-142、伝統と現代社。
ヨーゼフ・クライナー編
2012 『近代〈日本意識〉の成立―民俗学・民族学の貢献―』東京堂出版。
大阪毎日新聞朝鮮版
1934年2月13日 「燦然たる文化を紹介 理解を持たせる 生れ出た『朝鮮民俗学会』」『大阪毎日新聞』朝鮮版。
中央日報（韓国語文）
1932年4月22日 「民俗学会機関紙 朝鮮民俗発行」。
朝鮮日報（韓国語文）
1932年4月16日 「民俗学会創立 5月に『朝鮮民俗』創刊」。
1933年2月2日 咸大勳「読書欄「朝鮮民俗」을 讀함」。
東亜日報（韓国語文）
1932年4月21日 「朝鮮民俗學會創立 雑誌朝鮮民俗發刊」。
1933年1月31日 「新刊紹介 朝鮮民俗一月」。
1934年6月13日 「新刊紹介 朝鮮民俗第二号」など。

「宋錫夏著作目録」

（国立民俗博物館編『石南宋錫夏』に収録されなかった新資料には＊印をつける）

1．1926年11月3日、〈慶州邑誌에 對한 私見〉《東亞日報》
2．1929年4月、「朝鮮の人形芝居」『民俗藝術』2-4、民俗藝術の会
3．1932年8月、「朝鮮の民俗劇」『民俗学』4-8
4．1932年9月、〈南方移秧歌〉《新朝鮮》3
5．1933年1月、〈創刊辭〉《朝鮮民俗》1

6．1933 年 1 月、〈五廣大小考〉《朝鮮民俗》1
7．1933 年 1 月、〈The reference Books on Korean Folk-lore No. 1〉《朝鮮民俗》1
＊8．1933 年 1 月、〈去年度各雑誌掲載朝鮮民俗学関係文献〉《朝鮮民俗》1
＊9．1933 年 1 月、〈編輯後記〉《朝鮮民俗》1
10. 1933 年 1 月、「朝鮮の婚姻習俗」『旅と伝説』6-1
11. 1933 年 4 月、「朝鮮演劇」『大百科事典』第 17 巻、平凡社
12. 1933 年 7 月、「朝鮮　出産と藁」『旅と伝説』6-7
13. 1933 年 7 月、「各地の葬礼　朝鮮」『旅と伝説』6-7
14. 1933 年 10 月、「Onanie の朝鮮語に就て」『ドルメン』2-10
15. 1933 年 11 月、「朴僉知劇に対する数三考察」『人形芝居』1-4、京都、郷土演劇協会
16. 1933 年 12 月 16、17、19、20 日、〈鳳山의　舞踊假面〉《東亞日報》
17. 1934 年 1 月、〈朝鮮의　正月과　農業〉《學燈》
18. 1934 年 3-9 月、〈民俗學은　무엇인가〉《學燈》
19. 1934 年 3 月 30 日-4 月 1 日、〈民俗藝術의　紹介에　對하야　―金浦　農民舞踊　東京派遣을　契機로〉《東亜日報》
20. 1934 年 4 月 1-6 日、〈祈豊、占豊과　民俗〉《朝鮮中央日報》
21. 1934 年 4 月 21、22、24-27、29、30 日、〈南朝鮮　假面劇의　復興氣運　―晋州　人士의　誠意的　企圖〉《東亜日報》
22. 1934 年 4 月 23-27 日、〈祈豊、占豊과　民俗（續）〉《朝鮮中央日報》
23. 1934 年 5 月、〈東萊野遊臺詞〉《朝鮮民俗》2
24. 1934 年 5 月、〈The reference Books and Materials on Korean Folk-lore No. 2〉《朝鮮民俗》2
＊25. 1934 年 5 月、〈去年度各誌掲載朝鮮民俗学関係文献〉《朝鮮民俗》2
＊26. 1934 年 5 月、〈編輯後記〉《朝鮮民俗》2
27. 1934 年 7 月 9 日、〈山과　民俗〉《朝鮮中央日報》
＊28. 1934 年 7 月 14、15、17 日、「民衆の情緒と年中行事」『大阪毎日新聞』朝鮮版
29. 1934 年 8 月、「朝鮮の民謡と舞踊」『郷土藝術』3-8、東京、郷土藝術社（1934 年 7 月『大阪毎日新聞』再収録）
＊30. 1934 年 9 月、「朝鮮の舞踊」『旅と伝説』7-9
31. 1934 年 9 月、「沙里院民俗舞踊に就て」『ドルメン』3-9
32. 1934 年 10 月 23-25 日、〈黄倡傳說　戯化의　復活　―慶州의　今年　秋夕行事〉《朝鮮日報》
33. 1934 年 11 月、〈風神考　附禾竿考〉《震檀學報》1
34. 1935 年 1 月 12-16 日、〈正月과　民俗〉《朝鮮中央日報》
＊35. 1935 年 3 月、「ホスアビ考（案山子考）」、横井照秀編『案山子考』住吉土俗研究会
36. 1935 年 3 月、「索戦考」『田舎』第 11 号、横井照秀（赤城）編、大坂、住吉土俗研究会
37. 1935 年 3 月 13 日、〈民俗劇「東萊野遊」 ―그　復活에　際하야　一言함〉《東亜日報》
38. 1935 年 4 月、〈處容舞、儺禮、山臺劇의　關係를　論함〉《震檀學報》2
39. 1935 年 5 月 6-8 日、〈民俗採訪雑記〉《朝鮮中央日報》
40. 1935 年 6 月 22、23、25-30 日、7 月 2-7、9-13、15 日、〈農村娯楽의　助長과　淨化에　對한　私見　―特히　傳承娯楽과　將來娯楽의　關係에　就하야〉《東亜日報》
41. 1935 年 8 月、〈民俗学　僿想〉《中央》
42. 1935 年 10 月 3-6、8、10、11 日、〈傳承音樂과　廣大　―史的回顧와　將來의　用意〉《東亜日報》
43. 1935 年 11 月、〈伝承되어온　朝鮮　婦女의　스포―츠〉《新家庭》3-11
44. 1935 年 11 月、〈新羅의　民俗〉《朝光》1-1
45. 1935 年 11 月、〈神話　傳說의　新羅〉《朝光》1-1
46. 1935 年 12 月-1936 年 8 月、〈朝鮮各道民俗概觀〉《新東亜》
47. 1936 年 1 月 1 日、〈民俗의　振作　調査研究　機関〉《東亜日報》
48. 1936 年 2 月、〈朝鮮文化問答室　廣大란　무슨　뜻인가〉《朝光》2-2
49. 1936 年 3 月、〈初期民俗學의　研究領域　及　對象〉《學燈》2・3 合号
50. 1936 年 3 月 26、27、29、31 日、〈新羅의　狻猊와　北青의　獅子〉《東亜日報》
51. 1936 年 3 月、〈憂慮되는　不健全한　娯楽機関〉《新東亜》
＊52. 1936 年 4 月、「新羅の狻猊と北青の獅子」『旅と伝説』9-4
53. 1936 年 4 月、〈朝鮮文化問答室　假面이란　무엇인가？〉《朝光》2-4
54. 1936 年 5 月、〈鞦韆의　由來〉《新家庭》4-5

55. 1936 年 7 月、〈朝鮮史上　八大人物에　對한　所感〉《新東亜》
56. 1936 年 8 月、〈반가운　傾向과　消息〉《新東亜》
＊57. 1936 年 8 月、〈내가　잊지　못하는　그山　그江〉《朝光》2-8
58. 1936 年 9 月、〈倡調劇　春香傳小論　―主로　倡調劇　全體에　對한　問題〉《劇藝術》5
59. 1937 年 1 月 4 日、〈煙滅되여　가는　古俗의　扶持者인　古代小說〉《朝鮮日報》
60. 1937 年 5 月 15、16、18 日、〈鳳山民俗舞踊考　―演劇學上　及　舞踊系統上으로〉《朝鮮日報》
61. 1937 年 9 月 7-8 日、〈讀書餘響　―新秋燈下에　읽히고　싶은　書籍　―껌卿의　『民俗学概論』　民俗藝術参考書〉《東亜日報》
62. 1937 年 12 月、〈南方移秧歌〉、洪炳哲編《學海》學海社（1932 年 9 月《新朝鮮》再収録）
63. 1938 年 4 月 21-24、28、29 日、〈朝鮮의　鄕土藝術　―簡單한　史的　梗概〉《朝鮮日報》
64. 1938 年 5 月 7 日、〈煙滅에서　復活로　燦然히　빗난　民藝大會〉《朝鮮日報》
65. 1938 年 6 月、〈傳承노리의　由來〉《朝光》4-6
＊66. 1938 年 6 月、〈設問〉《朝光》4-6
67. 1938 年 6 月 10、12、14 日、〈民俗에서　風俗으로　―煙滅하는　民俗에서　새　呼吸을！〉《東亞日報》
68. 1938 年 6 月 15 日、〈新文化　輸入과　우리　民俗　―煙滅의　學術資料를　擁護하자〉《朝鮮日報》
69. 1938 年 7 月 7-10、12、13 日、〈鄕土文化를　차저서　長興篇〉《朝鮮日報》
＊70. 1938 年 7-8 月、「南鮮の移秧歌」『日本民俗』32、33、東京、日本民俗協会
71. 1938 年 10 月 8 日、〈雅樂聽後偶感　―今般　公演을　契機로〉《朝鮮日報》
72. 1938 年 11 月 2、3、5、8-10、13 日、〈鄕土文化를　차저서　慈城，厚昌篇〉《朝鮮日報》
73. 1938 年 12 月 23 日、〈鄕土藝術의　保存　―鳳山탈춤　保存會　設立에　際하야〉《朝鮮日報》
74. 1939 年 1 月 3 日、〈朝鮮舞踊의　史的　概觀〉《東亞日報》
75. 1939 年 1 月 4 日、〈索戰은　簡易化　―奬勵의　母體機関　必要〉《東亞日報》
76. 1939 年 1 月 10 日、〈生活을　潤澤　잇게　하는　우리의　家庭娛樂〉《東亞日報》
77. 1939 年 2 月、〈蒐集斷想〉《文章》1-1
78. 1939 年 2 月 18 日、〈書誌學上의　珍本인　『麗版法華經』（卷五六七）〉《朝鮮日報》
79. 1939 年 3 月、〈洪景來의　人物과　戰法〉《新世紀》3
＊80. 1939 年 3 月、〈世上의　안해여　男便을　理解하라〉《女性》4-3、朝鮮日報社
81. 1939 年 6 月、〈湖巖의　追憶―湖巖文一平의　生涯와　業績〉《朝光》5-6
82. 1939 年 8 月、「民俗舞踊琑談」『観光朝鮮』1-2
＊83. 1939 年 9 月 30 日、〈良書告知板〉《朝鮮日報》
84. 1939 年 10 月、「朝鮮の仮面演劇舞踊」『観光朝鮮』1-3
85. 1939 年 10 月 13-14 日、〈海州康鴿의　假面演劇舞　―中央公演　消息을　듯고〉《東亞日報》
86. 1940 年 6 月、〈序〉、朴英晩著《朝鮮伝来童話集》学芸社
87. 1940 年 7 月、〈鳳山假面劇脚本〉《文章》2-6
88. 1940 年 7 月 14 日、〈實로　國寶이다（絶種됏던　佛教界珍本“牟子”冊板을　発見）〉《朝鮮日報》
89. 1940 年 9 月、「今村翁と瓠杯」『書物同好会会報』9 号
90. 1940 年 10 月、「社堂考」『朝鮮民俗』3
＊91. 1940 年 10 月、「書評　村山智順著　朝鮮の鄕土神祀第一部　部落祭」『朝鮮民俗』3
＊92. 1940 年 10 月、「書評　村山智順著　朝鮮の鄕土神祀第二部　釈奠・祈雨・安宅」『朝鮮民俗』3
＊93. 1940 年 10 月、「書評　朴英晩著　朝鮮伝来童話集（朝鮮文）」『朝鮮民俗』3
94. 1940 年 10 月、〈雪嶽征服〉《朝光》6-10
95. 1941 年 2 月、「半島における農民生活の娯楽的一面」『緑旗』6-2
96. 1941 年 4 月、〈朝鮮傳承娛樂의　分類〉《朝光》7-4
97. 1941 年 4 月、〈鄕土藝術과　農村娛樂의　振興策　―農村娛樂〉《三千里》13-4
98. 1941 年 12 月、〈輯安高句麗　古墳과　樂器〉《春秋》2-11
99. 1941 年 12 月、「梅月堂藁」『書物同好会会報』14 号
100. 1942 年 9 月、「月印釈譜考」『書物同好会会報』17 号
101. 1943 年 8 月、「現存朝鮮楽譜」、『東亜音楽論叢　田辺先生還暦記念』山一書房
＊102. 1943 年 10 月、「戦時下隨想　―秋娥の脱出」『朝鮮』341
103. 1944 年 8 月、〈太平洋의 여기저기 퍼저널린 色民俗〉《放送之友》2-8、朝鮮放送出版協會
104. 1944 年 10 月、「序」、印南高一『朝鮮の演劇』北光書房、東京
105. 1946 年 3 月 18 日〈調査団長　宋錫夏씨 談 ―文化人의義務遂行〉《朝鮮日報》
106. 1946 年 12 月 19 日、〈民俗舞踊展望〉《京鄕新聞》

＊107. 1947 年 4 月 13 日、〈山岳을　国力 7 割로　―植木週刊에　際하야〉《朝鮮日報》
108. 1947 年 7 月、〈序〉、崔常壽著《朝鮮民間傳說集》乙酉文化社
109. 1947 年 10 月、〈民俗藝術問題〉《民主警察》
110. 1947 年 11 月 9 日、〈黑山島의　傳說과　海神의　‘性’〉《京鄉新聞》
＊111. 1948 年 1 月、〈古色蒼然한　歷史的　遺跡　鬱陵島를　찾어서！〉《國際報道》3-1、國際報道聯盟
112. 1956 年 5 月、〈허수아비考〉、韓國民俗學會《民俗學報》1（1935 年 3 月「ホスアビ考」を崔常壽が韓国語訳したもの）

〈座談会〉
1937 年 7 月、〈鳳山탈춤　座談會〉《朝光》3-7　孫晋泰／宋錫夏／李鍾泰／李東碧／韓相健／羅雲善／金辰玉／金景錫／金確實／嚴善珠／金眞淑／李惠求／李相南／咸大勳／盧子泳／玄仁圭
＊1937 年 8 月、「朝鮮カラーを語る（座談會）」『朝鮮』267 號　（来賓）秋葉隆／玄憲／宋錫夏／孫晋泰／田中德太郎／金基衍／李基世　（主催側）稲川鉄道局旅客係長／島田鉄道書記／村山本府嘱託／倉元本誌記者
1938 年 1 月 4 日、〈朝鮮語　技術　問題　座談會〉《朝鮮日報》金珖燮／李克魯／柳致眞／宋錫夏／趙潤濟／崔益翰／崔鉉培　（本社）成尙勳、洪起文
1938 年 1 月 1、4、6 日、〈舊慣陋習　打破　―社會各界人士의　高見　早婚禁止　適齡婚　奬励〉《東亞日報》朴勝彬／徐光卨／李克魯／宋錫夏／孫貞圭　等
1938 年 7 月、〈東西對抗　獵奇　座談會〉《朝光》4-7　庾秋岡／朴慶浩／宋錫夏／申鼎言／咸大勳／金來成
1941 年 4 月、〈朝鮮武藝와　競技를　말하는　座談會〉《朝光》7-4　宋錫夏／申鼎言／柳子厚／吳祥根／崔汝成／庾秋岡／李甲燮／方鍾鉉
1941 年 5 月、〈崔承喜의　舞踊과　抱負를　듯는　鼎談會〉《朝光》7-5　崔承喜／咸和鎭／宋錫夏
＊1942 年 12 月、「朝鮮の豊年踊を語る」『文化朝鮮』4-5　秋葉隆／孫晋泰／宋錫夏／今村鞆
1944 年 4 月、〈農村娛楽振興　座談會〉《朝光》102　秋葉隆／宋錫夏／玄濟明／孫晋泰／三木尚／姜珽澤／重松中山　等

〈その他〉
＊韓国文化院連合会蔚山廣域市支会編『石南　宋錫夏가　註解　民俗語　모음』2011